

結婚満足度の指標と出生 日本の夫婦の場合

A Composite Indicator of Marital Happiness and Children

吉田 千鶴 (関東学院大学)

Chizu Yoshida (Kanto Gakuin University)

chizuy@kanto-gakuin.ac.jp

はじめに

本報告の目的は、結婚の満足度の指標を作成し、その指標と出生可能性との間の関係について、対立する二つの仮説を検証する。ひとつめの仮説は、結婚の満足度が高いほど、子どもをもちやすいというものである。もうひとつの仮説は、結婚の満足度が低いほど子どもをもちやすいというものである。なぜなら、結婚の満足度がより低い人は、子どもをもつことによって幸せを求めやすいと考えられるからである。

1. データ

本報告が使用するデータは、2004年に行われた「結婚と家族に関する国際比較調査」(以下 JGGS-1 と呼ぶ) とそのフォローアップから引き出されたもので、20~39歳の有配偶女性と20~39歳の妻をもつ有配偶男性から構成される。JGGS-1は、家族関係や生活状況に関する情報収集を目的とし、18~69歳の全配偶関係の男女を対象として、層化二段無作為抽出法によって行われた。サンプルフレームは15000であり、58%の男性と63%の女性が自記入式調査票に回答した。18~49歳の全配偶関係の男女が、JGGS-2(2007年)、JGGS-3(2010年)そしてJGGS-4(2013年)によってフォローアップされた。

2. 結婚の満足度の複合指標

JGGS-1では、結婚の満足度について回答者の意識を聞く質問項目がなかったため、結婚の満足度の複合指標を作成した。その複合指標は、お金の使い方や家事分担など、家族生活の様々な面について回答者と配偶者の同意の程度についての質問から構成した。ここでは、結婚の満足度と配偶者間の同意の程度には正の相関があることを仮定している。

3. 結婚の満足度と出生

ロジットモデルを使用し、結婚の満足度と出生可能性との関係を検証した。従属変数は、調査の間に出生があれば1、出生がなければ0の値をとる変数である。説明変数は、JGGS-1、JGGS-2、JGGS-3での結婚満足度の指標である。コントロール変数は、子ども数、妻の出生年月、妻と夫それぞれの教育水準である。

分析の結果から、既にいる子どもの数が出生に与える影響を除いたうえで、女性の結婚満足度は、第1子や第2子の出生に対し統計的に有意な関係はない。男性の結婚満足度は第1子の出生に対し有意な関係はないが、第2子に対しては統計的に有意な正の影響を持つと言える。

謝辞 データの使用を許可下さった JGGP 委員会 (日本の世代とジェンダー・プロジェクト委員会) に深く感謝する